



## 「第7回 日本エシカル推進協議会 JEI エシカル・ラボ」 報告書

- 【開催日時】 2019年6月27日(木)18:00～20:00  
【開催場所】 博展セミナースペース2F セミナールーム  
東京都中央区築地1丁目13-14NBF 東銀座スクエア2F  
【主催】 一般社団法人日本エシカル推進協議会(JEI)

### ◆プログラム◆

- 18:00 エシカルラボ開会【開会挨拶】  
一般社団法人日本エシカル推進協議会(JEI)会長 中原 秀樹
- 18:05～19:40【特別講演】  
講演者:認定 NPO 法人アニマルライツセンター代表 岡田 千尋 氏  
講演テーマ:「アニマルウェルフェア」
- 19:40～19:55【質疑応答】
- 19:55 エシカルラボ閉会【閉会挨拶】  
JEI 会長 中原秀樹

### ラボの主旨

モノに囲まれた豊かな暮らしは私たちの欲望を満足させましたが、豊かさが作り出した様々な汚染が地球に与えた長期的なダメージ、物質至上主義がもたらした生態系や文化の破壊、貧困や失業の蔓延などは、これから何世代もが直面しなければならない課題も作ってきました。

ベトナム戦争や南アのアパルト政策に自分のお金が使われているということを知った消費者が、自分たちが働いて得たお金をこのような非人道的なことに使ってほしくないという思いから、資金の引揚、投資の撤退というダイベストメントから始まったのがエシカル行動です。地球上に住むすべての人々とその子孫の未来に関わるこれらの課題に答えを出すためには、消費者の地球規模の共通のエシカルな努力が不可欠であるといえます。持続可能な開発目標SDGsの「誰一人として置き去りはしない」という決意はまさにグローバルなエシカル推進活動そのものであるといえます。

このエシカル活動を担っている人や組織に耳を傾け、知ることが、エシカルを推進していくうえで重要であると考え、日本エシカル推進協議会 JEI はエシカルを担う人・組織との交流会を開くことにしました。

(一般社団法人日本エシカル推進協議会)

## **特別講演**

**講演者:**岡田 千尋 氏

(認定 NPO 法人 アニマルライツセンター代表)

### **「アニマルウェルフェア」**

今回のエシカルラボは、認定 NPO 法人アニマルライツセンター代表の岡田氏にお越し頂き、アニマルウェルフェアについてご講義頂いた。ご講義では、普段あまり聞く機会のない畜産動物の本来の姿や、畜産動物としての飼育状況などを動画や写真などを交えわかりやすくご説明頂いた。さらに日本の畜産動物においてアニマルウェルフェアへの対応が遅れていることや、動物福祉の面だけでなく畜産物による健康面でのリスクなどについてもお話頂いた。

#### **《講義要約》**

動物に関する議論として、アニマルライツとアニマルウェルフェア、これら 2 つの明確に異なる考え方が存在する。前者は哲学的な考え方で、「種差別」をせずにすべての動物の権利を認め、人間が動物を利用することをしないという考えで、アニマルライツセンターはこの考えに基づいた社会を目指している。一方で後者のアニマルウェルフェアという考え方は科学的な根拠に基づいた考えで、人間が動物を利用するという前提の上で動物がいかにストレスなく、その動物らしい生活ができるか配慮をする、というものである。

本日は最も数が多い畜産動物について、後者のアニマルウェルフェアという観点でのお話をしたい。

当団体はアニマルウェルフェアについて、人間の飼育によって生み出される苦しみを少しでも減らすべきという考えに基づいた活動を行っている。アニマルウェルフェアの始まりとしては、1965 年にイギリスで提唱された「5 つの自由」という国際スタンダードが存在する。これには飢餓や恐怖からの自由や、正常な行動ができる自由など基本的なものが含まれ、これに加えて最近では「喜びなどのポジティブな体験ができる自由」なども提唱されている。

アニマルウェルフェアの考えにおいてはこれらの「自由」が動物を適切に飼育するうえでどういった役割を果たし、どのようなメリットを及ぼすかということが科学的に検証され、様々な飼育方法などが規定される。

日本で利用される畜産動物は年間で約10億頭、世界では600～700億頭と言われている。そして地球上に存在する哺乳類の60%さらに鳥類の70%が畜産動物と言われるほど、人間は多くの動物を作り出し、飼育している。本日は畜産動物が今どのような状況にあるかをお話しする前にまず、彼らがどういった動物であるかお話ししたい。

#### <豚>

- ・行動範囲が広く、1日で東京ドーム4～6個分移動する
- ・猪と同じで、森の中での生活が基本
- ・複数の母豚を中心に群れで暮らす
- ・出産の直前に群れを離れて巣をつくり、出産して1～2週間後に群れに合流する
- ・仲間を識別して、共同で子育てをする
- ・硬い鼻で穴を掘って食べ物を探したり、土を食べる
- ・寄生虫を落としたり保湿するために泥浴びをする
- ・研究によると、犬よりも賢く、人間の3歳児やチンパンジーと同等の知能を持つ

#### <鶏>

- ・身を隠せる場所を好む
- ・地面をつついたりご飯を探すことに60%の時間をつかう
- ・1日に1～1.5万回地面をつつく
- ・親子の結び付きが強く、雛が孵化した後も親の羽毛の中で12～16週間を過ごす
- ・母性本能が強く、仲間の雛の世話もする
- ・砂浴びをすることで汚れを落とす
- ・日光浴をして、心身の健康を保つ
- ・夜はなるべく高いところで身を休め、身を守る本能がある

#### <牛>

- ・毎日45キロの草を食べ、115リットルの水を飲む
- ・人間の164倍の糞尿を排泄する
- ・8キロ先のにおいを嗅ぎ分ける
- ・自然界では、群れをつくって行動する
- ・屋内よりも、雨が降っていても外を選ぶ
- ・他の家畜動物と同じく、それぞれの個体に様々な性格がある

これらすべての畜産動物に共通して、自然のなかで自身の健康を保つ術を本能として身に付けていることが言える。研究者の調査によると、本来の自然な行動ができない畜産動物は、健康を損なっているというデータも発表されている。

例えば鶏は、本来は夜には身を守るために高いところにある止まり木で身を休めるが、ケージ飼育されている採卵鶏はそれができないため、足の骨が細く、強度が弱いことが分かっている。身動きが十分に取れないため、翼の骨も細い。このような科学的なデータが蓄積されつつある。

それぞれの家畜動物の本来の姿をお話ししたところで、次にこれらの動物たちが畜産業においてどのような扱いを受けているのかお話ししたい。

(冒頭、動画による紹介 : <https://www.youtube.com/watch?v=d8QCa2Gkif4>)

こちらについても豚、鶏、牛それぞれが置かれている状況について個別に取り上げ、具体的なデータや近年の日本や海外の動きについてお話しする。

(さらに詳細なデータなどについては講義資料を参考にされたい)

※パーセンテージなどの数値は日本国内についてのもの

<豚>

- ・63.6%の農家で「歯の切断」を行っており、後遺症のデータも多く残っている
- ・94.6%の豚が麻酔なしで去勢され、心的外傷疾患によって死亡する子豚もいる
- ・81.5%の豚が尾を切断されている
- ・88.6%の農場で母豚に「妊娠ストール」という身動きのとれない檻が使用されている
- ・妊娠ストールは実は生産効率が悪いということが世界共通認識になりつつある
- ・他の先進国に比べて、日本の養豚場での豚の生育率は低い
- ・世界で次々に規制されている妊娠ストールだが、日本では使用率が増えている
- ・世界 1~7 位の食肉加工会社が妊娠ストールを使わないポリシーを実施または宣言するなか、4 位の日本ハムだけがアニマルウェルフェアについての言及をしていない
- ・多くの外資企業が妊娠ストール廃止を宣言し、法律で規制する国も増えている

<採卵鶏>

- ・92%の養鶏場でバタリーケージという狭い檻(1羽あたり平均 20×21.5 cm)を採用している
- ・日本では1羽あたりの最低飼育面積に関する法規制がないため、いくらでも狭い環境で飼育できてしまう
- ・海外では1羽あたりの必要な面積が定められている国が多い
- ・床が斜めになっていることで卵を集めるレールに転がっていく仕組みになっている
- ・世界ではケージを使わない流れが広がっており、スターバックス社やマクドナルドなどの大企業を含め 1,727 社がすでに「ケージフリー宣言」をしている
- ・海外では消費者の意識も高く、企業は「1羽あたりの飼育面積の広さ」で競争し、差別化を図っている
- ・日本の養鶏場では多くが、ストレスで互いを傷つけないよう、「デビーキング」と呼ばれるクチバシのカットを行っている
- ・出荷できない廃鶏が出た際、正しい淘汰方法で処理せず、餓死させたりそのまま焼却する農場もある
- ・と畜場での動物福祉についても課題が多くある
- ・正しく首を切らないまま次の工程に進んで熱湯に入れられると、生体反応で鶏の体が真っ赤になり、廃棄されることになる(日本ではその割合が高い)
- ・欧米を中心に、より人道的かつ効率的な屠殺方法が導入されている
- ・すでに開発されているより高度で機械化された屠殺によって、労働者の負担も軽減できる

<肉用鶏(ブロイラー)>

- ・本来 120~150 日かけて成鶏になるところ、50 日で成長するように品種改良されている
- ・まだ「ピョピョ」と鳴く段階で十分な大きさに成長し屠殺される
- ・不自然な成長スピードによって歩行困難に陥り、痛みの中で生活する鶏が多い
- ・採卵鶏と同じく、1羽あたりの飼育面積の規制がないため、いくらでも詰め込める
- ・欧米では、疾病の少ない、より自然な成長スピードで鶏を育てる企業も増えている

## 〈乳牛〉

- ・飼育方法には主に「放牧」、「フリーバーン」、「フリーストール」、「繋ぎ飼い」の 4 パターンがある
- ・フリーバーンとフリーストールは牛舎の中で自由に動き回れるというスタイルで、この方法ではいちばん多くの牛を飼育することができる
- ・73%の農家が採用している繋ぎ飼いでは、身体的そして精神的に拘束される
- ・繋ぎ飼いをすることで、糞尿の処理や各種の疾病など、牛だけでなく農家の負担が増える面も多い
- ・関節炎、蹄の病気、乳房炎、難産など、他にも運動ができない環境で育つことで様々な疾病を発症し、屠殺の段階の前に廃棄される個体も一定数存在する
- ・関東で限定された敷地内でもフリーストールで適切な環境を保つ努力をし、牛も健康に育っている農家もあるため、日本に土地がないということは繋ぎ飼いの理由としては不適切である
- ・アニマルウェルフェアに配慮された乳牛の牛乳は、高価だがそれだけ味も良いという声がある
- ・動物や労働者にやさしい農場で働きたい若者も多く、後継者不足も解消できるという傾向がある

ここまでお話しした動物の本来の姿や畜産の現状を踏まえてアニマルウェルフェアについてまとめると、それは「不自然な飼育をしない」ということに尽きる。

そしてアニマルウェルフェアは人間の健康にも大いに関係しているため、動物にとって自然な飼育方法を採用することは人間にとってのメリットにもなるという認識が重要であり、海外を中心に広がりつつある。

たとえば、前述のバタリーケージで飼育している鶏は自身で衛生状態を管理できる状態ではなく、農家は殺虫剤などの薬剤散布によって身体につく虫を駆除している。そしてそのような薬剤の継続的な使用によって、薬剤耐性菌が生まれる環境がつくられる。とくに抗生物質の耐性菌によるリスクは深刻であり、2050 年にはそれによって 1,000 万人が死亡するとの予測もある。ガンの死亡者数よりも多い予測だ。鶏、豚、牛であれ、本来必要のない薬剤を投与するのは人間が不自然な飼育方法をしているからであり、動物が本来のあり方を保てるような自然に近い飼育方法にすることで、薬剤を投与する必要はなくなるのである。

心配すべきは将来のリスクだけではない。厚生労働省の調査により、日本の鶏肉の薬剤耐性菌保有率が他国のものに比べて高いことが発表されている。食べる前に十分加熱するなど注意喚起を行っているが、健康への影響が心配される。

アニマルウェルフェアは、近年では経済の面でも無視できない重要事項となりつつある。つまり、アニマルウェルフェアに取り組まない企業は、経営リスクを抱える時代になりつつあるということだ。271 兆円を運用する機関投資会社 23 社が、アニマルウェルフェアに関する宣言に署名し、大企業をはじめ投資先の企業のアニマルウェルフェアに関する取り組みに目を光らせている。そしてグローバル企業は次々にアニマルウェルフェアに関する目標を掲げ始めている。

そのような流れの中、日本企業は遅れをとっているのが現状である。影響力のあるグローバル企業 150 社がアニマルウェルフェアの取り組みに関して評価された際には、評価対象となった日本企業は 5 社とも最低ランクに格付けされた。海外では多少でも畜産物を扱う場合はアニマルウェルフェアのポリシーが公表されるという「新常識」のなか、日本ではその水準に全く追いついていない。

法律の面でも、EU やアメリカの一部の州、オーストラリアなどの国が積極的かつ具体的に畜

産動物を対象とした法律を制定するなか、日本では畜産動物よりもペットなどの愛玩動物を守る対象とする法律が中心で、畜産動物が守られる法律はほとんど整備されていない。EUでは、日本で当たり前のように使われている妊娠ストールやバタリーケージなども法律で禁止されている。さらにヨーロッパだけではなく、中国や韓国などのアジア諸国でも、アニマルウェルフェアを配慮するための法律が積極的に作られている。

なぜ日本ではアニマルウェルフェアが促進されないのだろうか。これは、市民の認知度が低いことが関係していると考えている。認知度が低い原因は、動物保護団体の活動内容や、消費者の無関心などがあるのではないだろうか。一方で、当団体が行ったアンケートによると、86%の回答者が、方法があるのならばより良い飼育方法での動物の飼育を望んでいることがわかっており、消費者と生産者がお互いに刺激し高め合い、より良いものにシフトしていく機会は十分に窺えると言える。

当団体では、生産者やサプライチェーンを担う企業に対して、まず容易にできる改善策を積極的に提案している。食肉を仕入れる企業であれば、仕入れ先の国を変える提案などもする。本格的な「アニマルウェルフェアのポリシー」の作成提案も行うがなかなかハードルが高いため、初めの第一歩をお手伝いすることをまずは大切にしている。みなさんの身近な企業にも、アニマルウェルフェアについての取り組みの第一歩を踏み出していただけよう、ぜひご提案いただきたい。当団体のホームページには畜産動物やアニマルウェルフェアに関する資料を多く掲載しており、必要な場面でご活用いただきたい。

<講義資料>

<https://drive.google.com/file/d/1FXLLmE3EvfW2H6UU37FtesMaruQI41Ge/view>

#### 【次回予告】

- 開催日時:8月1日(木)18:00~20:00
- 開催場所:博展セミナースペース2F セミナールーム  
東京都中央区築地1丁目13-14 NBF 東銀座スクエア 2F  
(株式会社博展セミナースペース)1階にタリーズコーヒーがあります。
- 【アクセス】地下鉄 東銀座駅 5番出口より徒歩2分
- エシカルを担う人・組織 登壇者  
日弁連消費者問題対策委員会副委員長 島田 広 弁護士
- お話しいただく内容(予定):「エシカルと消費者の教育」
- 参加費:JEI 会員 500円、非会員(1,000円)
- 申込先:nakahara@jeijc.org  
(氏名、ご所属、メールアドレスを明記の上お申込み下さい)

~~~~~  
皆様の参加をお待ちしています。

JEI 会長 中原秀樹